

2023年4月

■今月の特選句



入管の手続き踏まず来し黄砂

竹下和宏

入管手続きを無視しているからね。そろそろ嚴重注意の上、場合によっては入国を拒否しよう。



啓蟄の鼻毛句会に出てきたか

加藤潤子

うっかり、よくあることよ。マスクも外してよくなった今、くれぐれも注意せにやあいかん。なぬ鼻毛が勝手に句会に出たのか。なら仕方あるまい。



若布茹で化学変化のお勉強

山内 更

「先生、理科の時間なのになぜ味噌汁を用意するんですか」
「身の周りに勉強の題材があるんだよ。誰だ若布食べたのは」
「胃袋で変化させます」。

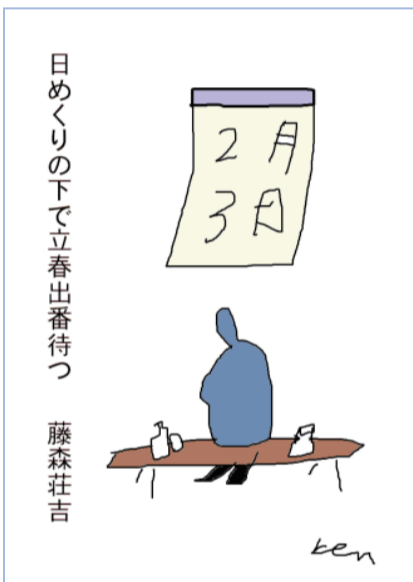
■今月の特選句



日脚伸ぶちよつと巴里まで宇宙迄

西野周次

巴里までとは凄いね。更に宇宙までとは、その発想が楽しい。だけど予算は大丈夫だろうね。片道切符しか買えないんじゃないからねえ。



日めくりの下で立春出番待つ

藤森荘吉

出番が近づくのを息をひそめて待っていたんだろう。いざ、その日となり、「日めくりの下」から「暦の上」では春になるが、寒さは残っているね。



番犬を尻目に恋猫の出陣

久松久子

何も目に入らなくなるのが恋である。それは猫とて同じこと。番犬が怖くて恋ができるか。このやるせない思いはニャンともしがたいんだよなあ。

■今月の秀逸句（・・・七七をつけてみました）

俳人と蜂を引き寄せ梅の花 ・・・俳人と蜂目的違ふ	吉川正紀子
隙あらばいざ飛ばんとす春帽子 ・・・特に鰐広帽子は危険	八塚一青
留守番の気をつかわない大嚏 ^{クサメ} ・・・ついでの放屁ものびのびとして	田村米生
花筵エビの尻尾が落ちている ・・・この人たちは贅沢したね	桑田愛子
伸びてきて仔犬眠らす日脚かな ・・・ダックスフントも脚伸ばしきり	南とんぼ
カーナビに頼つて迷ふ四月馬鹿 ・・・四月でなくても年中迷ひ	花岡直樹
黙食の卓につこり落の薑 ・・・口に入れたら苦くてだまり	横山洋子
蝌蚪の国まるで渋谷のスクランブル ・・・渋谷が蝌蚪の国めくや	峰崎成規
泣いている花粉症の吾を山笑う ・・・笑はないでよ眠つてゐてよ	長井知則
小雨かと問はれ答へる春雨と ・・・傘がないから濡れて行かうか	和田のり子
春暁の靴音行くのか帰るのか ・・・いつもはつきりしないあの人	大林和代
6Bでししししなぞる春炬燵 ・・・黙つていてねしししししい	渡部美香
鹿の糞黒いダイヤか梅日和 ・・・指輪にはちと大きすぎるか	遠藤真太郎

■今月の滑稽句

* 今月の特選句・秀逸句以外の佳句を青字で表示しています。

間道の藪の目白に招かる	相原共良
野遊びや猫に欠伸をうつされて	相原共良
その鼻毛伸ばしきつたる梅の花	相原共良
春闘の蚊帳の外です年金者	青木輝子
勝負服まとい出陣新社員	青木輝子
欲の腹満足しない四月馬鹿	青木輝子
食べたくも折つてはならぬ軒氷柱	赤瀬川至安
指先凍つ手足口病かも知れぬ	赤瀬川至安
新人が天を取るなり初句会	赤瀬川至安
春立つや空のカーテン開け広げ	井口夏子
生若く丈そろひたる土筆摘む	井口夏子
立春の好きな和菓子のピンク色	井口夏子
バレンタイン義理チョコ無理チョコ撒き餌チョコ	池田亮二
裸木も生きているぜと春を待つ	池田亮二
春めきてにはかに白髪気にかかり	石塚柚彩
雪面を敢へて転げてゆく児かな	石塚柚彩
不揃ひな孫のクッキーバレンタイン	石塚柚彩
春窮に我を追い込む電気代	伊藤浩睦
揚雲雀騙すの上手い鷺もみて	伊藤浩睦
腹の足しにならぬ水菜の水臭さ	伊藤浩睦
花衣つめばまつはる色いろいろ	稲沢進一
愛されて何処へも行かず冬の鯉	稲沢進一
考える足はゆっくり雪深し	稲沢進一
春一番に高層ビルは知らん顔	稲葉純子
トタン屋根におぼろ月夜と猫二匹	稲葉純子
幸福を名乗る桜の花ひらく	稲葉純子
桜餅小さくなりて二個所望	井野ひろみ
虹眺めエレベーターの通過する	井野ひろみ
春霞む中に出かけるなんとなく	上山美穂
帰る鳥都会の空を高く飛び	上山美穂
梅ふふむ直前蕾にエネルギー	上山美穂
貝汁をちらしに添へて雛祭	梅野光子
卒業の娘に一輪桜咲く	梅野光子
花冷の娘に届く「桜咲く」	梅野光子
新社員 カラオケイップス治りけり	遠藤真太郎
不時着の睡魔が延長する朝寝	遠藤真太郎
春一番今年は夜にイメチェンです	大林和代
梅園の花と人とで満腹に	大林和代

菜の花や手をふる子らの汽車が行く	小笠原満喜恵
香香(シャンシャン)と惜別の春元気でね	小笠原満喜恵
宇和の里よりオオハクチョウの北帰行	小笠原満喜恵
さくら鯛頭に鯛の形(なり)の骨	岡田廣江
三寒四温に合わせて三日休む鳥	岡田廣江
春光をあび道のべの遍路墓	岡田廣江
すつ転び大の字でみる春の空	加藤潤子
スカートの花もひらひら風光る	加藤潤子
花好きなお家にミモザ花盛り	門屋 定
卒業生親に愛を師に感謝を	門屋 定
水仙や黄色の花の温かさ	門屋 定
旅始「鬼太郎袋」活躍し	北熊紀生
風光る赤さん襦袢(むつき)に文句あり	北熊紀生
若布食べそのたびに梳く我が髪を	木村 浩
若布買う育毛剤を買う気分	木村 浩
啓蟄や万年床の居候	金城正則
寒卵ともNHKのロゴマーク	金城正則
氷点下君を待ってる雪女	金城正則
春うらちちょっと月までお見合いに	久我正明
蛇穴を出て湯を変えぬ湯に浸かる	久我正明
自分の顔をみつめ直すマスクかな	久我正明
仏の座台座傾く村はづれ	工藤泰子
古雛の御髪の傷み整へる	工藤泰子
こだはりの鶯餅が鳴きだして	工藤泰子
エビチリの照りの煌く春の卓	桑田愛子
灰暗き世に十葉の白十字	桑田愛子
擦れ違ふ園児らの靴春の音	壽命秀次
大根を漬け終へ腰をイナバウアー	壽命秀次
焼芋の黄金の湯気妻さそふ	壽命秀次
我が影にせつつかされて日脚伸ぶ	白井道義
跳び箱を一段上げて春を待つ	白井道義
受験子の気合ひを入れて祓はるる	白井道義
日没の草臥れた空春の塵	鈴鹿洋子
春昼の寝息を立てる膝枕	鈴鹿洋子
鼻を抜ける芹の香りの青さかな	鈴鹿洋子
人参が嫌いなんて言ってる場合じゃない	鈴木和枝
消費税加算前の人参になれ	鈴木和枝
冬を頑張った電線にハト来てカラス来て	鈴木和枝

丹頂の両翼高く首高く	高須賀溪山
ペンペンとぺんぺん草のお辞儀かな	高須賀溪山
菜畑を分けてアンパンマン列車行く	高須賀溪山
無礼講の花筵にもある上座	高田敏男
啖呵売花の下でも稼ぎけり	高田敏男
花疲飲んで騒いで哀れなり	高田敏男
誰も知らぬ顔あり春の家族葬	竹下和宏
遠来の黄砂と交叉する花粉	竹下和宏
晴れやかな胸の裸婦像春立ちぬ	田中 勇
食国(おすくに)の文化ふめつや建国日	田中 勇
上を向いてごらんとかたくりの花に	田中 勇
佐保姫の裾踏まぬよう登りけり	田中やすあき
次郎吉といふ猫通る春の闇	田中やすあき
白酒に喧嘩はじめる官女かな	田中やすあき
猫の子が香箱座り出来たのね	谷本 宴
爺婆も雛に戻るか雛の家	谷本 宴
こつてりのラーメン食べたし春愁	谷本 宴
着ぶくれの芥(ごみ)とも見えてゴミ当番	田村米生
霜焼も老の手皸に外方(そっぽ)むく	田村米生
帰るべき家無き人形雛の市	月城花風
浮かれ猫赤子の声に応へけり	月城花風
春一番値上げの看板なぎ倒し	月城花風
受験生キットカットを握りしめ	土屋泰山
スマートフォンが虎造唸る春の夜	土屋泰山
どんぶらこ三寒四温どんぶりこ	土屋泰山
春一番思い出すのはキャンディーズ	坪田節子
産直市にやっと見つけたつくづくし	坪田節子
けだかさがまなざしに出で古雛	坪田節子
如月といへども昼は脱ぐ単衣	長井知則
懐かしや都の香り東風に乗り	長井知則
雪隠の窓借景の木の芽山	名本敦子
逃水も共に止めたる信号機	名本敦子
ほうと啼きけきよと収めてのどけしや	名本敦子
岩畳さ走る春の水の綺羅	西野周次
春ふふむ赤子に日増し蹴る力	西野周次
絶滅の恐れの子語や落葉焚	花岡直樹
啓蟄やビールの泡もうごめきぬ	花岡直樹

さくらさくらこつけい俳句に咲く切り絵
 花筵歩く形に靴脱がれ
 臺がたつ大根畑も一つの景
 西洋のたんぽぽ殖やし国際化
 森一つ占めて姿なき囀り
 いつこうにドラマの起きぬ春の宵
 祝杯のグラスのかたちチューリップ
 町に行くんだ乗せてくれんか春の雲
 大試験時事問題を後回し
 山笑ふ登つて来れば膝笑ふ
 春寒し覚束なきは千鳥足
 どっこいしょやおら芽を出すチューリップ
 立春と暦は言うが籠りきり
 二月礼者身も蓋もなき長話
 俳人を立たせてみたき春の川
 一月に詠む二月の句春を待つ
 混浴の猿のぼせてる雪見の湯
 寸鉄秘す女のコート真っ白
 春泥を一步も踏まぬ万歩計
 亀鳴くや宰相のみに「聞く力」
 雪虫と見る大法螺吹き喉ぼとけ
 ケサランパサラン気球か雪虫か
 窓越しに白梅アップデート中
 流水に乗って行きたや国後に
 終らせてくれぬか戦を雪女
 一途なる世に憚らず恋の猫
 買ったての眼鏡にまぶし春の景
 びつしりのつくしんぼうにたたらふむ
 とりこになつたよくすり売りの紙風船
 風花を寒い寒いと大げさに
 ひと鍬に耕の根気生まれり
 立雛の膝から下が疲れ切る
 分身の術でござると根分けかな
 受け取りのハンコを押しに地虫出づ
 足元の背伸びしてをり蜃気楼
 コロナ禍の白旗に替へ白マスク
 胴上げの吹き上がるごと卒業す

浜田イツミ
 浜田イツミ
 浜田イツミ
 久松久子
 久松久子
 日根野聖子
 日根野聖子
 日根野聖子
 藤森荘吉
 藤森荘吉
 細川岩男
 細川岩男
 細川岩男
 ほりもとちか
 ほりもとちか
 ほりもとちか
 南とんぼ
 南とんぼ
 峰崎成規
 峰崎成規
 椋本望生
 椋本望生
 椋本望生
 村松道夫
 村松道夫
 村松道夫
 森岡香代子
 森岡香代子
 森岡香代子
 八木 健
 八木 健
 八木 健
 八塚一青
 八塚一青
 柳 紅生
 柳 紅生
 柳 紅生

太陽の齡四十六億春隣	柳村光寛
お礼肥鼻目に置く老桜	柳村光寛
鶯を鳴かす真夜中電子辞書	柳村光寛
テーブルの甘平の山皮となる	山内 更
春満月夜に花粉を可視化する	山内 更
芝桜みつよつ咲いて広がりぬ	山岡純子
青空へ黄水仙の葉ぐんぐんと	山岡純子
折り紙のひいな飾られ台所	山岡純子
初春の訃報危篤の知らせなく	山下正純
茶毘に付す十六日桜咲きし日に	山下正純
納骨や墓守となり寒桜	山下正純
いろいろで注目される寒卵	山本 賜
軽トラで祭太鼓が到着す	山本 賜
見つめられ激しく縮む毛虫かな	山本 賜
マスク取れ素顔に会ふや卒業式	横山洋子
なの花の葉っぱ花芽を包みけり	横山洋子
蒨の臺地球の皮を破りたる	吉川正紀子
咲き終へし梅の古木や深呼吸	吉川正紀子
水槽の魚嫉ましい杉花粉	吉原瑞雲
手に唾し枝を払へば春の風	吉原瑞雲
ぴーひやら、祭囃子が憂さ払ふ	吉原瑞雲
清拭の母の背骨や春を待つ	渡部美香
うらかや初心者マークの掃除ロボ	渡部美香
大欠伸マスクに隠すもピアス揺れ	和田のり子
ひそみゐる蕾を囁す春の鳥	和田のり子